

昭和46年2月1日 第3種郵便物認可
平成21年3月1日発行（毎月一回）日発行
俳句雑誌 沖 第40巻第3号

沖

俳句雑誌[おき]

3
月号

沖
發行所

踊り字

能村 研三

若者不在の俳句

俳句は基本的には、個の文芸であるが、昔から連衆という言葉があるように、私たちは現在結社に所属して、その仲間からもさまざまな力をもらっている。自分を確認するのも中々一人で出来るものではなく、連衆による力が大きく左右する。

そして結社の上には俳人協会などの協会組織がある。俳句を純粹に作っていく上では、結社はまだしもその上部組織の協会などは自分と関係のないものと判断する人もいるだろうが、超結社的に俳壇を見回す中から今の俳句の位置というものが見えてくるような気がする。

一月から二月にかけて、東京では俳句や短歌の総合雑誌を刊行する出版社の新年会や俳人協会賞の受賞式を兼ねた懇親会が開かれるが、私も都合のつく限り出席するようにしている。出版社主催によるものは、俳人のみならず歌人とも交流できる機会も与えられる。

しかし、「沖」の人たちはほとんどの人が、これらに参加しないのは残念である。

また、俳句をやっていると地域的なつながりというのも重要である。

春意とはことば運びのなめらかに

色褪せし種袋にて頼りなき

峻厳な人より貰ふ春の風邪

抱き弾くコントラバスの春愁

ゲラ刷りの踊り字直し地虫出づ

交差せる氷上の傷鋭くて

料峭や声洩れさうな懺悔室

沼はまだ覚めてはをらず余寒なほ

棒読みの代理挨拶春寒し

負け方のマナーもありし四温晴

私は、千葉県や市川市においてもいろいろな協会の仕事に携わっている。スケジュール的にも大変な事ではあるが、地域という身近なところでの交流にも大きな意義がある。俳人の交流は何も俳人だけではなく、他のジャンルの異文化交流というものも視野に入れていかななくてはならない。現在私は仕事の関係から地元では画家や写真家、音楽家など多くのジャンルの方々と交流の機会を得ていることは大変ありがたいことである。

能村 研三



立春前後

林 翔

仰げば尊し

三月と言えば卒業の月、遠い少年時代を憶い出してしまった。

小学校五年生の三月、六年生が卒業式を迎える日、在校生を代表して五年生一同も式場に入り、校長先生の式辞や来賓の祝辞の後、五年生全員で「蛍の光」を二番まで唱った。ついで卒業生全員で合唱したが、「仰げば尊し」の歌。家で姉が唱っていたから大体は知っていたが、卒業生全員で唱うのを聴くと、しみじみ好きな歌だと思った。

爆音は遠空に消え冬麗ら
葉なき樹の肢体うつくし冬の朝

二月四日 立春

今日よりは春の膝掛け春暖炉

百万の皺と喜ぶ春立つを

仰げば尊し わが師の恩

教への庭にも はや幾とせ

思へばいと疾し この歳月としづき

今こそ別れめ いざさらば

互ひに睡みし 日ごろの恩

別るる後にも やよ忘るな

身を立て名を挙げ やよ励めよ

今こそ別れめ いざさらば

秀^ほつ枝なる紅梅咲けり何の幸

梅あちこち散歩の道が長くなる

生き競べしてみようかね老梅くん

青空に枝は直立芽吹前

造成地土の赫きに下萌ゆる

春の陽を底まで入れて露天風呂

朝夕なれにし 学びの窓

蛍のともし火 積む白雪

忘るる間ぞ無き 逝く年月

今こそ別れめ いざさらば

あと一年たつたら自分達も、この歌を唱つて卒業するのだなど、しみじみ思った。

ところが、四月から校長先生が替った。いろいろ改革されたらしいが子供にはわからない。卒業が近づくと、唱歌の時間に口語体の卒業歌を練習させられた。わかり易い代りに全然感動が無い。どんな歌だったか卒業すると直ぐに忘れてしまった。



林 翔

蒼茫集



黒薩摩

淵上千津

餅を搗く

松本圭司

磨れゆく全集の類名草枯る
一月や庭木の待てる禊雨
たつぷりの福茶の果報黒薩摩
初富士のくつきり人も世も信ず
皆どこか病めど声張る初句会
刈り込んで促す冬芽無垢無心

身の内の昭和力が餅を搗く
青竹が竹馬となり歩きけり
海国の星ぜいたくにクリスマス
断崖を打つ波尽きず鷹飛べり
灯台の高さがさびし冬銀河
岬山の眠りに波の子守歌

ピアノ蓋

荒井千佐代

射手

辻直美

磨ぎ汁を畑へ流して小晦日
遠目にも全病窓に冬の灯よ
ピアノ蓋開くや黒白^{こくびやく}淑氣満つ
大寒のルカ伝背筋伸ばし読む
寒星にまぎれ終便飛行灯
冬深む赤子を回し抱きしては

射手として立つ一月の袴かな
木枯の波状攻撃受けてをり
喪籠りの掃きだし口の初雀
夫よ座に在せ桜櫓匂ふまで
読初の「御法」紫みまかりぬ
一人眠れば浮寝鳥さながらに

幸 先 藤原照子

生きてゐる地球のこゑや冬怒濤
山眠るもとより姿寝て在す
公園に白杵とどき霜日和
しなやかに角巻の雪はらひけり
深夜放送昭和づくしや雪もよひ
幸先や総武線より雪の富士

高度灯 北川英子

花の息にくもる花屋の寒の玻璃
またたかねば凍つるや赤き高度灯
初空へガウデイの意志またも伸ぶ
小走りに次の寒灯までの距離
また一つ試歩を導く路の臺
是非もなき笛やラガーの泥んこ泣き

すべからく 辻 美奈子

一億五千万粒日矢を珠とし初日受く
初声にすべからく血の通ひけり

朽ちてゆく至福に擲落葉かな
ねんねこの中に賢者は眠りけり
鳥葬の鳥に神の座寒早
武蔵野の冬木父性の匂ひあり

旅の終り 千田百里

たましひにいろありとせば竜の王
去年今年わが家を出づる厨水
凍蝶や旅の終りの翅たたみ
霜来るかホイップの角確と立ち
読まず書かず寒の底抜け晴たまひ
花鋏使へば春を呼ぶ音かな

初 東 風 遠藤真砂明

注連飾るメーンマストのてつぺんに
初東風の波が舳先に翼なす
初泣やをみな児なれど高らかに
冬草を過ぐ浮雲の青き影
冬潮へ停泊灯のゆらぎ点く
煮大根の芯まで熱しいのち愛し

潮鳴集



木のポスト

諸岡和子

あらたまのビルの林を飛行船

読初は蝶の分布図日のやはき

菰巻の一樹に風の体当り

繭もりめくかまくらに膝折りて

梟鳩亭の棲んでぬさうな木のポスト

力 瘤

佐々木よし子

一瞬の富士たふとかり初電車

ビル壁に線画となりて蔦枯るる

寢息聴くことも看取りや去年今年

初漁の船を押し出す力瘤

先頭は金管楽器銀杏散る

呼び名

高木嘉久

靴音のみなモノトーン霜の花

裸木がトスしたやうに暁の月

枯木立オブジェは街になじみけり

北風の呼び名変はりて新任地

厚着抜け体温計の電子音

蜜の瓶

林 昭太郎

寒晴や振つて叩いて蜜の瓶

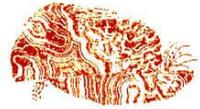
玉葱の芯のさみどり冬深し

凍星や眼球ふたつ水湛へ

風呂吹の芯まで煮えて夫婦なり

凧やインク掠れしボールペン

沖作品



能村研三選

元海女と言ふつくも髪時雨傘

千葉

鈴木 伸一

プラチナの冬日が覗く大漁旗
静脈のあらはな鳶の冬の壁
粕汁や佐渡の戸波を聞いてゐる
アクロポリス崩れし如く霜を踏む
大晦日港は船を抱き込みて

長崎

柿本 麗子

島聖堂の鍵穴太し藪椿
生けるものへいのちを繋ぐ寒の雨
バチカン展の螺鈿のひかり笹子鳴く
削げるもの削ぎ落す粋冬木立
いたはりといふ色あらば冬桜
御神籤にご利益期限十二月
紅葉散る伸身二回宙返り
潮満ちて風生るる刻冬岬
いのちとは漢字一文字去年今年

東京

七種 年男

冬あたたかベンチに鳩の忘れ羽根

千葉

井原 美鳥

冬の流星靴音の尖りくる
あをぞらてふ大カンバスに冬木の芽
流れつく浮標に韓語冬深む
師情とは父情に等し大冬木
空白の職業欄や風花す
揺れるから深まるころ冬林檎
大言の男が残す隙間風
保育器の小さき欠伸冬萌ゆる
寒波来るシートベルトの金属音
青い地球の温暖化てふ寒さかな
極月の終ひの不動閑かなり
北限の「福来みかん」や遠筑波
盃満たし除喪の元朝ひとりなり
裏まさりの羽織ひらりと御慶かな

千葉

上田 玲子

東京

藤原はる美

沖作品 15句選評

*
能村研三

アクトロポリス崩れし如く霜を踏む 鈴木 伸一

ギリシャのアテネの町にそびえるアクトロポリスは、「高い丘の上の都市」を意味する。その中心に立つのがパルテノン神殿で、古代ギリシャ文明の栄光の象徴となっていて世界遺産の一つにもなっている。高さが七十メートルもあり、石灰岩の台地にそびえる神殿で、堅固な要塞でもあった。私はまだ一度も行ったことはないが、先師登四郎はかつて訪ねたことがあり「欧州紀行」の中にも紹介されている。四十六本の白いドリス式の柱が立っているが、それを遠くから見ると地中から寒い日に盛り上がる霜柱にも似ている。ガリバーのような大きな人がアクトロポリスを踏み崩しているかのようでもあった。

島聖堂の鍵穴太し藪椿 柿本 麗子

先秋、九州大会の折に出津にあるド・口神父が建てたという大野教会を訪ねた。建物のほぼ四方を廻る壁は、ド・口神父の

指導によって築かれた「ド・口壁」と呼ばれるもので、いつもは無人で鍵がかかっていた。この日は案内の方が鍵を開けてくれた。この句は、島にある聖堂であるから、平戸や五島にある聖堂で詠まれた句と思うが、島人のほとんどがカトリック教徒で、鍵穴が太いことから何か島人のおおらかさと信仰の篤さが窺える。

いたはりといふ色あらば冬桜 七種 年男

桜といえば春たけなわの花だが、冬桜は十二月から一月にかけて咲き、梅に似た寂しさをもった美しさがある。寒くなっけなげに咲く花であるから、余計に人の心にも温もりを感じさせる。普通の桜よりもやや淡い白っぽい色は、人の心の寒さを温めてくれるいたわりの色にも思えてきた。

冬の流星靴音の尖りくる 井原 美鳥

真冬の夜空は、澄んでいるのでキラキラと星が輝いて見える。北斗七星やオリオン座など冬の星座もくっきりと見えるが、その瞬間ふっと星が流れた。冴えている夜なので、もの音も敏感に伝わるのか、路上を歩く靴音もいつもよりも金属的に尖って聞えた。

保育器の小さき欠伸冬萌ゆる 藤原はる美

体重が小さく生まれた赤ちゃんは、未熟なために保育器の中で体温調節をする。産院のガラス窓越しに、保育器は透明な箱の中に入れていて、赤ちゃんを観察、処置しやすいように工夫されている。最初は、親や家族もその成長に心配をしていたが、今日は小さな欠伸をするのを見せしてくれた。その欠伸は小さな命が確かに生きている証でもあった。(以下略)